

## 仙台近郊巡検

山本佳世子

仙台市といえば、古来から陸奥文化の中心地、また、戦国武将の伊達正宗の本拠地というイメージが非常に強い。そして、現在、仙台市は、1988年の政令指定都市への昇格を契機として、東北地方の中心都市としての成長が著しい。私達、大学院1年生5名は、このような仙台市の東北大学で、10月10・11日に開催された、日本地理学会秋季学術大会の翌日に、井内教授の御指導のもと、仙台市泉区・多賀城市を対象とし、「広域中心都市仙台の近郊の宅地化と歴史的遺産の保護」についての考察を目的とした巡検を行った。12日の巡検当日は雨天であったが、そのためにかえって、辺りの風景が霞がかかったように見え、私達は、しっとりとした杜の都仙台の情緒を満喫することができた。

まず、10時に、市営地下鉄勾当台公園駅に集合した。この辺りは宮城県庁や仙台市役所、大企業の支店・支社が数多く近接しており、仙台市の行政・経済の中心地区なのだが、勾当台公園の木々の緑が周辺の建物や街路と見事に調和した美しい場所である。この駅から市営地下鉄を利用して、私達は泉区の泉パークタウンへ向かった。このニュータウンは仙台市北郊に位置しており、仙台市の今日の発展を予想して、約20年前から、三菱地所が中心となって開発を始めたということであった。現在では、家族を仙台市に残した単身赴任者世帯や市中心部のオフィス街へと通勤する勤労者世帯が入居するケースが最も多いのだが、ごく稀に定年退職後に、東京などの大都市圏から転入して来た世帯も入居するそうである。実際には、このニュータウンは私の予想よりもやや小規

模ながら、周囲の自然環境や仙台市中心部へのアクセスは良好で、街並みも理想的に整備されており、これからの発展が期待される。

次に、再び市営地下鉄を利用してJR仙台駅に行き、午後からは、JR仙石線で多賀城市へと向かった。この多賀城市は、8世紀に、蝦夷征討の根拠地及び国府の置かれた場所であり、その頃には、万葉歌人の大伴家持も按察使兼鎮守将軍としてその任にあたっていた。現在、多賀城市は仙台市近郊のベッドタウンとしての性格をもっているが、仙台市が政令指定都市の認可を受けた際に、泉市を始めとする近隣市町が仙台市へと編入されたのに対し、多賀城市が独立して自らの地位を確立しえたことは、非常に興味深い。多賀城市役所での聞き取り調査の時にも、担当職員の方の話から、仙台市という大都市に全面的に依存せず、小都市としての利点を生かし、快適な市民生活を送るための社会資本の充実を図ろうとする意気込みが感じられた。

現在の仙台市は、政令指定都市に指定され、東北地方の中心都市として機能しているために、地方都市の中で最も発展が期待され、様々な分野からスポットライトが当てられている。だが、今回の巡検によって、都市の近代性だけではなく、都市としての歴史や周辺地域との関係についても、併せて考慮しなければならないということを改めて認識することができた。そういった意味でも、今回の巡検（井内教授にとっては、本学で最後の巡検になるということであるが）は、たいへん意義深いものであった。

(10月12日 井内教官指導)